聖十字姫クレア
淫虐の洗脳術

立ち読み版

小説 茶　　瓶
挿絵 佐藤　匠

第一章　赤毛の騎士　006
第二章　姫と従者　039
第三章　白濁の洗脳　081
第四章　淫疼の渇き　132
第五章　肛悦の堕王女　182
第六章　刻まれる絶頂　215
エピローグ　残熱　248

登場人物紹介

Characters

クレア＝ロルカ＝ベネディクト

ベネディクト王国の第四王女。聖十字騎士団を編成し、自らも戦場に赴く勇敢な女騎士。

セシル

聖十字騎士団隊長。クレアの側近であり、彼女の教育係的な立場で常に王女の支えとなっている。

ダグマール

ベネディクト王国の宰相。悪徳商人と繋がり、暴利を貪っている醜き男。

ミスティ

ダグマールに協力する謎の女魔術師。詳細は不明。

「んむぅ……れろ」
ピンク色の舌で溢れる先走り汁を舐め取ると、ネバネバした臭気をともなう粘液が口の中に溢れる。その味もなぜかそれほど不快ではなかった。
（おかしい…身体が…）
異変に気づいたのは、額を流れる汗からだった。妙に身体が熱い。
（また、私の身体に……）
ペニスを含みながら、横の妖女を睨みつける。
「あら？　どうしたのフェラチオしてて感じてきちゃったの？」
全てお見通しといった女の顔が癪に障る。しかしどんなに怒りを燃やそうとも、身体の火照りが徐々に高まっていくのを止められない。先日のあの時のように鼓動が、呼吸が荒くなってしまうのだ。
（くそ……一体どうしたんだ……）
「くっくっく……ワシのモノがそんなに美味いか？　それ、気に入ったのならもっと食わせてやるぞほれ、ほれ……」
口内の肉のたくましさが徐々に心地よくなってしまっていることに気づく。肉の先が口の天井部を突くと脳がぼーっとするような感覚が尻の方まで伝わってきてしまう。そこにきて喉奥をまでたっぷり肉を含むとその感覚が妖しい満足感となって、全身を満たしていってしまう。先ほどまで心の多くを占めていた嫌悪感が徐々に消え、代わりに身体を覆う疼きのようなものが染み出してきてしまう。

「んちゅ…ちゅぱぁ…ああむ…んふあぁ…んちゅうぅ……ちゅるっ…」
口の動きがねっとりと味わうようなフェラチオ奉仕に変わる。
「ん、どうした。ううおぉ……こんなに吸い付いてきよって。だいぶ奉仕が堂に入ってきたようだなぁぐふっふ……」
（な……私は何を……してるんだ……止まれ……ッ……止まって……っ）
口内粘膜が肉に吸い付き、恋人のペニスを一生懸命に奉仕しているような仕草。今までの無理矢理操られているのとは違う、憎き男にまるで自分からしゃぶりにいっているかのような巧妙な操縦。ぶぐッジュブっっと先走りと唾液が混じり合って粘音が立つ。その液体を嚥下する度に、熱い吐息が漏れていってしまうのだった。
「王女様…なんかエロいぜ…」「本当にフェラチオを楽しんでるって顔だな…」
男たちの声にも興奮の度合いが強くなってくる。男たちに屈辱的なことを言われながらも奉仕を止めることができない。張った太腿がもじもじと股を擦り合わせ、クレアの象徴でもある勇猛な赤毛がいやらしい奉仕とともに揺れる様が普段の彼女とのギャップを与え、男たちを一層楽しませていた。
ゴクリ……ッ。
先走りの液体を自分から飲み込まされ、そのドロドロとしたモノが胃の中から内壁を伝い子宮までジーンと痺れるような疼きが発生する。
（あぁこんな汚らわしいものを飲んで……酷い味…ッ…）
そう、とても口に含むような味ではない。そんなおぞましい味覚にも妖しい快楽の予感

を得てしまう。肉塊の先端から出てくるたまらない臭さが癖になって、何度も鼻をヒクヒクさせてしまう。
「……クレア様……とても美味しそう……」
セシルがそんな主君の熱心な奉仕を見て、声をかけてくる。
（違うっ…違うんだ…っ…身体が勝手に……！）
憎き男に喜んで自分から奉仕をしているようにも見えてしまったであろう。その自分が置かれている状況を考え王女。
（セシル……見ないで……ぇっ）
勝手に奉仕してしまう身体を恥じ、顔を真っ赤に染める。女騎士の目は一瞬も逸らさずクレアの顔に向けられていた。痛いほどの視線をぶつけてくる。
（く……そう簡単に思い通りになってたまるか……っ）
守るべき友の目で僅かに意思を取り戻す。ミスティの恐ろしい魔術の言いなりになっているとはいえ、簡単に服従するわけにはいかない。自分の誇りにかけても。
（絶対に心を乱すな……）
身体の感覚を遮断し、機械的に奉仕をすることを心がける。身体の奥がじくじくと揺れるが目を閉じ無視しようとする。しかし、ミスティはその機械的な奉仕を許してはくれなかった。
「そうよ…、そうやって吸い続けてると、中からとっても美味しい白濁液が出てくるから…それを飲んだら貴女はもっと気持ちよくなれるのよ…」

目を瞑る姫の耳に淫靡な言葉を次々と囁きかけてくる。妖女の言葉の一つ一つのイメージがクレアの頭の中に再生される。肉の先から液体がほとばしる想像をした瞬間、身体に大きな快感が走った。

「んんんん……ッ……！」

全身に鳥肌が立った。口の中を通って、身体の奥までジーンとした感覚が走りぬける。

（お……落ち着け……ッ……落ち着くんだ……）

口内から発した激感に耐え、必死に冷静さを取り戻そうとする。しかし心とは裏腹に操られた唇が美味な男性器をよりじっくりと味わうように、熱心な口内奉仕を施してしまうのだ。摩擦される口腔粘膜がカッと熱くなり口の中の肉がやけに存在感を増してきた。

「くっくっく……色っぽい顔になってきたではないか……王女様はフェラチオ奴隷の素質があるようだな…。セシルもそうだと言っておるぞ……くっくっく…」

操られた相棒から突き刺さるほどの視線を感じてはいるが、あえてそちらに顔を向けなかった。いや、向けることができなかった。自分でも気づかないうちに表情がとろけてしまい、口内の熱に逆らえなくなっていた。鼻息が荒く甘い。喉奥までいっぱいに肉を頬張るとたまらない快感が腰奥で弾ける。

（あぁ……この感覚……おかしい……憎い男なのに……）

「ちゅくっ……ぷちゃっ…ちゅぶぶっ…ああんおおぉ……んん…んぐ……」

身体に走る悦楽に取り付かれたようにねっとりと口内感覚に没頭する。粘膜を先端の傘に絡みつかせると、秘めた膣内がよじられるかのような激感が走る。口の中の空気を吸い

取るように懸命に吸い付くと、どくどくと先走りの粘液が湧いてくる。その汚汁をゴクゴクと美味しそうに嚥下していく。
「はぁ…ッ……んんむむむ」
恍惚とした表情。一旦口を離してまじまじと肉棒を見つめると、その亀頭部分は唾液と淫液で妖しいぬめり、頭の中を炙られるようなすえた臭いが立ち込めていた。
（どうして……こんなものが…ッ…美味しそう……ッ…だなんて……ッ）
ゾクゾク…ッッ。
立派にそびえ立つ男のシンボルから目が離せない。痺れるような疼きが発生し、全身が甘い悪寒に震えた。触れられてもいない乳房が張り、乳首が痛いほど裏地を押し出す。
「ほっほっほ、この肉棒が欲しいかぁ？　ワシのペニスが欲しいのか？　どうだこれを喉の奥まで呑み込んで、たっぷりと舌で味わいたいんだろう？」
ゴクン……。
喉が大きく鳴った。口から唾液が溢れ出てくる。目の前の男を欲しがるように、秘肉がひくつき、愛液を分泌させる。腰奥がドクンッ…ドクンッ…と鼓動し、へその裏がカァァっと熱くなっていく。
「んはぁぁ…ッ…あぁぁ……ッ」
全身から汗が噴き出て、甘い鼻声を上げる騎士王女。女の発情臭を撒き散らしながら、男のペニスに悶える女の姿は娼婦顔負けの色気に溢れていた。
見ていた盗賊たちのボルテージも上がる一方だ。

「姫さん感じてるんじゃねえのか」「へへ…王女とは言っても所詮は女だよな」「男のチンポには勝てねぇってか」「「ゲッヘッヘ」」

下品な野次を飛ばす盗賊たち。自分が感じている姿を下賤な盗賊に見られているかと思うと死にたくなるほどの屈辱を感じる。

（違う……私は……ッ）

顔を紅潮させ、羞恥に震えながらそれでも口を肉に近づけていく王女の姿に男たちがさらに興奮のまなざしを向ける。

「はぁむ…んむ」

口いっぱいに広がる充足感。身体の奥を貫かれるような重い快感が頭を白く痺れさせていく。

「ふふふ。貴女の大事な部下も見ているわよ……貴女が宰相のオチンポを美味しそうに、愛しそうにしゃぶってる所……いっぱい見られてるのよぉ……」

完全に術に堕ちたクレアをさらに辱めようと、仮面女が囁きかけてくる。

「はぁ…ッ…クレア様…ぁ……ッ…」

熱烈な王女の奉仕に興奮したのかセシルの声もどこか荒く熱っぽい。その色っぽい声にドキッとして、横に視線を向けると、じっと、王女の艶姿を見つめる目。セシルは自分の主の心の底まで見通すようにじぃと穴が開くほど見つめている。クレアは自分がまるで蔑まれているかのような気持ちになってしまうのだ。

（……ッ…そんな目で…見ないで……ッッ）

最も近しい人に自分が男に奉仕し、快楽を得てしまっている様を露骨に見られる。そんな恥辱がクレアの身体を一層燃え立たせてしまう。慌ててセシルから視線を離すが、それでも常にじっと自分を見られているかと思うと羞恥で頭が霞んできてしまう。

（どうして…ッ…？　無理矢理されているのに……我慢できないッ…熱い……ッ）

身体が熱っぽくなってきて、口内の温度も上がってきているというのに、それでもダグマールの肉塊からは熱さを感じる。その熱に触れていると自分自身が溶けていってしまうような不思議な感覚に包まれてしまうのだ。

「んむむ……はあむ…んああむ…あん……んちゅ…」

徐々に熱に浮かされるように操られる奉仕に熱中していく乙女。口内の堅いペニスの存在感がますます強くなってきて、次第にそれに囚われていく。

「フフフ……ッ」

自分の術が順調に効いているのを見て、ほくそ笑む女占い師。クレアは身体の感覚を思い出したくない一心で目の前の「作業（フェラチオ）」に集中しているつもりなのだが、それが結果的にダグマールのペニスを喜ばせることになり、分泌液をより多く飲み込んでしまう。それが媚薬のような効果でもってクレアの身体を乱すのだ。次第に無理矢理奉仕させられているのか自分から奉仕しているのかわからなくなるという寸法である。

「れろれろぉ……ぐぽっ……じゅぶぶっ……んぐんぐ……んむぅ……ッッ」

（くそ…ッ…動くな……これ以上味わいたく……ない……ッ）

口内で勝手に動かされる舌先から淫靡な味が伝わってきて、それが身体をゾクゾクさせ

てしまう。身体がだんだん抑えきれなくなってきている。背筋がじくじくと疼き、言うことを聞いてくれない。乳首が尖り、鎧の裏側に擦れるのがたまらない。その疼きに抗おうとすればするほど余計に…身体の奥の部分に疼きが溜まってきてしまう。触られてもいないのに、乙女の花弁からはジュクジュクと蜜液が零れ出し、それが垂れ落ちるポタポタという音が羞恥を煽ってくる。

（身体が……昇って…ッ…しまう……ッ）

男の先走りを含む度に、身体の中心、おへその裏側がジーンと痺れる。その箇所が女の一番大事な場所――子を育む子宮であることはクレアも理解していた。そしてそれは自分の「女」がこの目の前の憎き男に反応してしまっていることの証でもあった。

「んんんーたまらん。これが王家のフェラチオ。これ以上我慢できそうもないぞ…」

（悔しい…こんな……やつに感じてしまうなんて……ッ）

どこまでも下劣な男に強く反応してしまう自分の女。自身を消し去りたいほどの絶望感。しかしそれよりも今は自分の身体がこれ以上おかしくなってしまうのが怖かった。

（……射精…ッ…されたら……ッ…どうなってしまう……ッ……）

性教育としての知識。男性器の機能の問題である。そう、大したことではない、はずだ。しかし射精というイメージが心臓の中でどくどくと脈打つように膨れ上がっていく。

（まずい……何とか……口を……ッ…離さないと……ッ）

自分の身体が、子宮がジンジンと疼いて仕方がない。身体が勝手に達してしまいそうな震えが爪先から伝わってくる。このまま絶頂してしまえば、目の前の男を欲してしまうよ

うなそんな恐ろしい事態に陥るかもしれない。何としても、一刻も早く口を離したい、この男から離れたい。しかし姫の上の口は身体の反応に従順だった。

「ちゅくっ……ぷちゃっ…ちゅぶぶっんんっ…んぐ……んちゅうぅ……ちゅるっ……ぷちゃっ…ちゅぶぶっ…あああんおおぉ……んん…んぐ……ちゅぱあぁ…」

「おおうっ…何と積極的な……王女様はよいスケベ奴隷になれますぞ！」

突然ペースアップした舌使いに、ダグマールの腰が上がった。それどころか、王女の白磁のような手がダグマールの醜悪なペニスに絡みつき、自ら射精させようと積極的に動き出したのだ。

（嫌ぁ……ッ！　…どうして……やめろ…やめてくれ……!!）

心が拒絶し抵抗すればするほど身体が熱くなり、奉仕に力が入っていってしまう。心と身体のアンバランスに精神がバラバラになりそうになる。

しゅっシュッジしゅっ！

興奮し爆発寸前の肉を柔らかな肌で猛然としごかれてはたまらない。すぐにダグマールは絶頂寸前の腰を使い出した。

「うぅ、そんなにワシの精液が欲しいのかぁ？　ならすぐにくれてやるぅぅ…」

「んああむ…あん……んちゅ…ちゅぱぁ…ああむ…」

（や……違う……っ……精液なんか…ッ…欲しくない……ッ）

ピンク色の唇を滅茶苦茶に動かしながら、刺激を与え続ける。肉棒がビクビクと脈打って快感を受けているのがわかる。射精の予兆である。しかしその射精の動きを思わせる動

きはクレアにも激しい快感となって襲い掛かっていた。
「んむむむぅぅぅうっぅ……ッ!!」
口腔粘膜を通過する熱い肉の塊がクレアの脳に直接の刺激となって伝わっていく。頭が朦朧としながらも必死になって肉棒に吸い付く。
全身の熱さが奥に奥にと集中してきて、弾けそうになる。おぞましい肉を頬張る度に口から唾液が溢れ、まるで極上の霜降り肉を味わうかのように咥え、奉仕をしてしまう。粘ついた液体が唇から零れ落ち、床に糸を引いて垂れる。
（やめろぉ……っ…動け……動いてくれ……ッ!!）
顔を真っ赤にしながら口の中に集中する。どれだけ嫌がっても愛撫の動きは止まらずまるで口の中が性感帯になってしまったかのようにビリビリと痺れ疼く。股間の布地からは滝のように愛液が流れ落ち、服としての機能を果たしていない。
……ぴちゃ……っぽた……ぶちゃ……。
姫騎士がどれだけ抵抗しようと、熱心な奉仕が止まることはなかった。男の肉棒をしゃぶるフェラチオ音、口から溢れる唾液や淫液が床に零れる音、奉仕王女の股間がよじれ、中の布と擦れ合う淫音、秘門から収まりきらなくなった淫蜜が床に落ちるポタポタという音。全てが混じり合い淫らなオーケストラを奏で、クレアの興奮を最大限に高めていた。
「さぁ……待ちに待った瞬間よ。存分に女の喜びを感じなさい」
絶頂が近い宰相がぐいっと腰を突き出してきた。
「オラオラ、出る、出すぞぉぉたっぷり飲め！」

「あああんおおぉ……んん…んぐ……」
（やめろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ……!!!）
王女の美麗な唇を女性器に見立て、ピストン運動をするように乱暴な腰使いをしてくる。喉奥を突かれると、意識が朦朧として、身体が快楽に流されそうになる。全身が汗で濡れ、秘裂からは絶えず蜜が噴き零れる。口内の蜜が原因となって、身体の奥から「濡れる」ような淫靡な快楽にクレアの脳裏が支配されていく。
「おぉぉぉぉぉぅぅっ！」
ビュルルルルルルルルルルル!!!
ビクンっと大きく太った男の腰が跳ねると、ペニスもそれに呼応するように口内で強く脈打つ。爆発するかのような勢いで、精液が乙女騎士の口内へと注ぎ込まれる。
最初に感じたのは熱さ。そして舌に感じる嫌な苦味。喉奥まで染め上げるかのような大量の粘液が発射される。
「――――ッ！」
突然頭が真っ白になる。喉奥に感じる熱さが灼熱の溶岩のように、感じる苦味がビリビリと痺れる疼きに。注ぎ込まれる精液がまるで自分の身体の中に直接浴びせかけられているような。
「んんんんんんんんぅぅぅっぅぅぅッッッ！！！！！」
危険な感覚に身体を丸めて堪えようとしたが、とても我慢できなかった。精液を含まされた口内から快感が爆発する。子宮に直接媚薬が浴びせかけられているかのような衝撃に

腰が何度も跳ね、愛液を水鉄砲のように噴き出す。真っ赤な顔を限界までのけぞらして、口の中のおぞましく甘美な男液（ミルク）を味わう。
（あぁぁぁ……ッッ……この……味……ッ……駄目ッッ……!!）
すえた苦味。喉の奥にまで染み渡るような臭く、まずくて、酷い味。そして甘美な味。
ビクビクビクビクゥゥゥ……ッッッ!!
脳が焼かれるような激しい感覚。胸がキュンンッ！と強く締め付けられ、たまらない感覚に子宮が膨れ上がる。
ぶしゃぁぁぁぁぁぁぁぁ!!
愛液が噴水のように噴き出て、ダグマールの脚を濡らす。身体をのけぞらせて何度も何度も汁を排泄する王女。
（んんんぅぅぅ……ッッ!!　身体が浮いてッ……）
「ぐあっはっはっは……そんなにワシの精液が気に入ってくれたのか？　とんだ淫乱王女だ。ほれもっとくれてやる味わえ！」
かさにかかって精液の残滓を王女の口内に吐き出していく。
「ちゅぶぶっ……ンンンッッ!!　……んちゅぱぁぁぁ……」
口に精液を溜める度に絶頂を迎え、それでもなお肉棒に残った精液を貪ろうと亀頭に吸い付く。
「んぁっぁぁぁぁぁぁ……ッ!!」
その場にじっとしていられず、口からペニスを吐き出して絶叫する。先日味わった絶頂

とはまるで比べものにならない。魂が抜き取られてしまうかのような女の幸福に酔いしれる王女。口から離れた肉棒がさらに大きく跳ね、残りの白濁液を姫の顔に、鎧に、太腿に浴びせかける。

（こんなの……ッ…おかしい……何度…も…ッ……果てる……ぅッ!!）

「おおお、イったぜ」「射精されながらイキやがった」「スケベ姫様はフェラチオが好きってか」

白濁と男たちの嘲笑に包まれながら、がくがくと身体を震わせアクメを味わう姫騎士。特に彼女の愛する参謀の粘っこい視線が絶頂の切なさを高め、そのアクメの時間を長く感じてしまう。

「はぁぁん……クレア様……ぁ」

「……んん……はぁぁ……ッ」

また女の極みを迎えたセシルと快楽の余韻と身体のだるさにうな垂れるクレアとの熱い吐息が性の饗宴を終えた場に色濃く漂っていた。

「ふうなかなかいい具合であったぞ。先ほどの無礼は不問に付すとしよう……。くっくっく。ぐわーはっはっはっは…」

ダグマールの高笑いを遠くに感じながらクレアの意識は堕ちていった。

「あぁ……もっと出してぇ……私を汚してぇ……」

懇願の言葉を言わされ、自分が精液で汚される想像をしてしまう。身体の奥底で渦巻き出している感覚が恐ろしい。秘粘膜の奥から反響する疼きが爆発しそうなほどに高まっているのだ。一刻も早くこの肉の凶器から遠ざかりたい。しかし手が離れない。これもダグマールが仮面女から受け取った淫術の一つであった。

「おやおやお姫様、そんなにその男のチンポがお気に入りですかな？　そうも精液を欲しがって。これはこれは…大した淫乱ぶりですなぁ…ふっふっふ……」

（くそ…っ…離れろ……離れてくれ……ッ）

手のひらに感じる射精の鼓動はいつまでも治まらず、布越しにクレアの肌を打つ。徐々に自分の身体が絶頂に向け高まってきているのを感じたクレアは無理矢理にでも手を引き離そうとする。

「ぬぉぉぉぉ！」

布ごと引きちぎろうとするような強引な動きがそのまま肉棒をしごく動きになって男のさらなる興奮を煽った。男はたまらず股間の凶器を王女の顔に向けた。

ビュクン！　ビュクッ！　ビュクッ!!

目の前で発射される白濁液。何度射精しても勢いの治まらないその脈動がクレアを正面から捉える。顔に口に疼く肉体に精液が降り注ぐ。

「はんんんぅぅ――――――――ッ！！！！」

切ない感覚が子宮で弾ける。肉棒を直接握ったまま身体を極限までのけぞらせ、切ない

アクメを迎える騎士王女。
（あぁぁぁぁぁぁ……ッッ……駄目……イクのは駄目……っ……飛ばされる……
……）
めくるめく瞬間を迎える王女にさらに追い討ちをかけようと、周りの囚人たちが徐々に輪を狭めるように近づき、男根を見せ付けるようにしごき出した。
（くぅぅっ……見るな……見てしまうと……おかしくされてしまう……ッ）
絶頂の最中であるのに、さらに子宮を切なく疼かせる肉棒の姿。それを視界から消そうと、顎を引き、強く目を瞑る。顔を紅潮させたその所作は自分の快楽を恥ずかしがっているようで、その光景が一層男たちを興奮させた。
「んふぅ……んッ……もっとオチンポ私に射精してぇぇ……ッ」
（やめろやめろやめろ……ッ……そんなこと……ッ…言わせるなぁ……ッ!!）
自らの口から出る淫語がクレアの心と肉体をさらに狂わせていく。
「おうぅぅっ！　すぐに姫さんの好きなものをプレゼントしてやるぜぇ」
口々に卑猥な言葉をつぶやき、猛然とペニスをしごき始める囚人たち。目を閉じたことでよりいやらしい想像をしてしまい、全身をカァッと燃え立たせてしまう。顔を手で隠し、悩ましくヒップを揺らしながらおぞましくも甘美な瞬間を少しでも遠ざけようとする。
「おおぉぉぉぉ！」「イクぜぇ！」「くれてやるぅぅぅ!!」
それぞれバラバラのタイミングで男たちが咆哮を上げる。一瞬遅れて灼熱の液体がクレアの肌に付着する。その熱さとすえた臭いが王女の心と肉体をさらに深く狂わせる。

「あぁぁ……ッ……イってぇぇッ！　……私をイかせてぇぇぇぇ……ッ!!!」
（あぁぁああぁ…ッ駄目だだめだめ……イクぅぅぅ!!）
全身に浴びせかけられる精液をハッキリと感じながら、アクメへと昇り詰めていく。目を閉じたことで余計に強く深く精液を味わってしまう。必死に俯いていた顔が反り返り、何度も何度も絶叫する。
「ンンンんん……!!　あはぁぁ……ッ…あぁぁ……おおおッッ!!!」
「おぉ、イってるイッてる」
ひやかす男たちの声も何度も身体をビクつかせる。全身が性感帯になったかのように精液を浴びせかけられる度にイク。
「私はイってない…イク……わけが……ない……」
ビクビクビクビクビク!!!
いつの間にか口が自由になっていた。心の奥で求めていたモノに満たされ、全身がガクガクと震える。秘唇がひくつき、愛液を水鉄砲のように噴き出す。身体が狂おしいほどの絶頂に包まれている。がその口だけは抵抗を示す。
「んん～？　クレア王女。イったのですかな？」
「ぁ……イって……ない……ぃ…ん」
赤毛を可愛らしく揺らしながら、本能的にそう言い返す。しかしその言葉は甘えるような声になってしまう。イクという言葉を我慢したばかりに、絶頂感が身体の中でまだ燻り続けているのだ。

（…無理矢理にでも…ッ……言わせてくれれば……っ……私は何を……ッッ）

自ら快楽を求め敗北を認めるような思考に恥じ入る。絶頂寸前までは無理矢理淫語を言わせて心を乱し、イった後は自分の言葉でイクと言うまでは思いっきりエクスタシーを感じさせない。身体の中で悦感が渦巻き、口に出さねばいつまでもジンジンと疼き続ける。

「しかし身体はこのように乱れて…先ほどはずいぶんと…王女とは思えぬほどはしたないイキ顔も晒していらっしゃったようで、これはどう見ても女の絶頂を極めたとしか……」

「私…がっ……こんな男相手に…イク……ものか…」

ふるふると首を振り、身体の反応を必死になって否定する。認めるわけにはいかない。認めてしまえば自分が自分でいられなくなる。全身から愛液のような色っぽい汗を滲ませながら、悦楽に耐える王女の姿は例えようもなく淫靡であった。

「正直になろうぜ姫さんよ」

王女のそんな痴態を見て囚人たちの興奮が再び高まってくる。

「どんだけ気張ってようが女の性には逆らえねえんだよ。特にあんたみたいな淫乱女にはなぁ。へっへっへ…」

死刑囚に淫乱呼ばわりされ、この上ない屈辱を感じる。

「おら、欲しいんだろ？　これがよ…」

射精直後であるのに立派にそそり立つ肉棒がクレアの女に揺さぶりをかける。先から漂う淫靡な香りが、口内のたまらない苦味を思い出させ、子宮を煮え立たせていく。

それでも心が屈服を嫌がった。王女としての誇り・仲間への思い・持って生まれた性

格・使命感…去来するもはや何だかわからないものが薄氷一枚でクレアを支えていた。
「やれやれ強情ですなぁ…。ならば思い知らせてやろうではないか、王女であるお前がどれだけ淫乱かということを。自分からハッキリと『イク』と言わせ否定したくてもできないほどの絶頂に叩き込んでくれるわ。ぐふふ……」
絶頂の余韻で脱力しているクレアの身体が動いた。いや、無理矢理意識とは関係なく動かされているのだ。射精直後で放心状態の男たちに大きなヒップをグッと突き出し、自分の指で股間の布をずらされる。爛れた処女の陰唇と綺麗なピンク色をした尻の穴が男たちの目に晒される。
（くそ……ぉっ……こんな屈辱的な……ッ）
男たちに大量の精液を吐き出された身体を晒す羞恥に赤くなる。その凛々しい横顔にもべっとりと濃厚な白濁液がこびりついており、自慢の赤毛が滲むほどに白く染められてしまっていた。乱れた衣服の所々も白濁し穢され、ガラスのような透き通った肌が徹底的に汚し尽くされてしまっていたのだった。
「おお…自分からいったぜ…」「あれが王女様のオマ〇コ…かぁ」「淫乱な王女様らしいスケベな作りをしてるぜ……」「あんなに見せ付けやがって……そんなに俺たちが欲しいのかよ……」
グシャグシャになった衣服をくねらせながら全身をぬめらせ、美麗な尻が精液まみれで揺れる様は男たちにとってたまらないものがあった。
男たちは自慰行為の直後であるというのに、すぐ肉棒をそそり立たせその綺麗な割れ目

にくぎづけになった。白濁と汗にまみれ、性感に弾む乙女騎士の身体は例えようもなく淫らで、それだけでも男たちの性欲を掻き立てるには十分であった。

（何を勝手なことを……っ！）

抵抗する術もなく、王女である自分が憎き男たちに秘めたる部分を見せ付けているというのは実に耐え難い屈辱だった。

「本来はこのまま王女様の純潔を頂きたい所なのだがねぇ……王女様を欲しがっている他の者の手前、処女は残しておかねばならんからなぁ……」

もってまわった言い回しで、精液の残る美尻を撫で回す宰相。絶頂運動に張った太腿にまで白濁が垂れ、その感触が熱い。

「まぁ楽しみは取っておくということで、今回は別の穴を使わせてもらうとしよう…ぐっふっふっふ…」

（そんな場所を……っ!!）

不穏な笑みを浮かべながら、王女の菊門を弄り始める豚宰相の指に先ほどの快感を忘れ吐き気にもにた不快感と殺意が湧き出てくる。

「許さんんんっ!!　このようなっ……絶対に殺してやるっっ!!!」

そう強く吐き捨てるように告げた…はずだった。が、

「……」

パクパクと口を開閉するだけで声が出ない。出てくるのはスーはーという空気だけで代わりに口から出たのは、

「……申し訳ございません…大事な前の穴は…さしあげられませんので……代わりに生意気で淫乱な私の…クレア王女のお尻の穴を……どうぞ心ゆくまで楽しんでください…」
王女の作法に法ったしとやかな言葉だった。しかしその内容は猥褻でさらに大きく尻を突き出し、アナルの形がハッキリとわかるくらいまで手で広げたポーズは淫乱女のそれに違いなかった。
「おお、そうでしたか。これは頂かなければ王女様に失礼にあたるというもの」
（馬鹿な……っ！　私はそんなことは……！）
またしても勝手に口から出た屈服の言葉に激しく動揺してしまう。乙女の口は止まらず次々に服従の言葉を続ける。
「どうぞ、尻穴の襞の一枚一枚まで存分に抉り抜いてくださいませ……」
さらに男を誘う言葉が出る。さらに自分の犯して欲しい場所を強調するように、濡れる太腿を上げ、爪先をはね上げ、高々と尻肉を突き出し、ゆっくりとのの字を描くように揺らす。
「ぬふふ……そんないやらしいポーズを取ってまで欲しかったとは…それではたっぷりと味わうがいい……」
精液と弾ける汗に濡れる美尻がくねくねと、欲しがるように円を描く。度重なる性感で開発された媚肉がむっちりと肉をつけ、快感に嬲られた肉体は赤く熱を持ち、桃のようにしっとりとした肌を見せ付けていた。
（どうして……どうして……!?）

好きなように口を操られ、どうしようもない気持ちになる。首を後ろに捻ると、王女の誘惑に応じるように凶悪な肉の塊が桃尻の谷間に押し付けられているではないか。しかし身体は動かず信じられないという顔でその光景を見つめるしかない。

「よしイクぞ……っ」

ぷりんッと突き出た美尻にダグマールの肉棒が突き入れられていく。

ずぼぉぉぉぉぉぉぉ。

「ああああああんんんんんっっ!!」

まるで淫女のような喘ぎ声。心からその行為に快楽を得ているような媚声。しかしそれとは裏腹にクレアの身体も心も悲鳴を上げる。

(がぁぁぁぁあぁぁあああぁぉぉぉぉッッ!!)

セシルは人と人のセックスは愛の行為だと言っていた。女性が純潔を守ろうとするのと同じくらい気高く神聖な行為なのだと。それが一人の男の欲望が打ち砕く。アナルセックスという初体験をもって。

そして一生隠しておきたい排泄口を犯されているという現実。このまま舌を噛み切って死んでしまいたいくらいの屈辱を味わうのであった。

「んん？　さすが淫乱王女様。早速順応し始めたわ。…っよっぽど美味いか？　柔らかくワシのモノを締め付けてくるわい…」

もはや慇懃さを捨て去った太宰相の言葉通り、初めてのしかも排泄孔での性行為であるのに、身体はそれを受け入れていた。しかもそれどころか、

（あぁ……身体の奥が……おかしい……ッッ…）

肉体の深い部分がキュンキュンと疼く。ダグマールの肉棒の先がお腹側の壁を深く貫く度に、胸が締め付けられるような切なく重い快感がズゥゥンとクレアの女を貫いていく。身体がバラバラになりそうなほどの痛みと屈辱なのに、それよりももっと大きな愉悦が直腸粘膜から染み出してきてしまうのだ。

「あぁん……んんッ……んんんッ……」

背中をのけぞらせて、その切ない異物感に耐える姫騎士。ベトベトに濡れた服がパツンパツンと音を立てて肌に張り付くのが心地よい。

「ほれ、ほれ！　ほれぇ！」

ズンズンズンズンッ。

何度も何度も子宮を尻粘膜の裏側から揺らしてくる。そうされるとズーンっという重く深い快感が、腰骨へと伝わり、腰が勝手に跳ねてしまう。

（あぁ……奥……ッ……奥……ぅ……ッ！）

処女でありながら子宮を責められる、そんな異常な快楽に酔いしれ顔を真っ赤に赤髪を振り乱す。何度も奥を突かれた肛門襞はとろとろにとろけ、憎き宰相の肉棒を愛しく締め付けるように食らいつく。

そしてその締め付けた箇所をダグマールの凶悪な亀頭で根こそぎ削り取られると腰が自然に浮き上がるような愉悦が全身に染み出してくる。その悦楽をもう一度味わいたいと、自然と憎き男の腰を追って桃尻を誘いこんでしまう。

「へっへっへ尻をほじられて感じてるぜ……」「王女様はアナルの方がお好みってわけかい」「とんだ淫乱王女だぜ…」

嘲る囚人たちの言葉にも反論できないほど、身体への衝撃は大きかった。

（あぁ信じ……られない……この男に……悔しいっ…！…悔しいっ……！）

どんなことをしてでも…この男を八つ裂きにできるならどんなことをしてもいい。今すぐこの地獄から解放してくれるなら…。

（そうでないと……私は……ッッ）

「あああぁんお尻…気持ちいいッ…アナルズボズボされるのたまんないですっ……私このままじゃ……お尻でイっちゃう……!!」

勝手に口から出る耳を覆いたくなるような隠語。自分の身体が心が作り変えられてしまう。そんな恐怖心とともに身体が浮くような快美感がじわじわと高まっていく。特に爛れた直腸粘膜を深く突かれる時が最もたまらなかった。奥の奥にまで弾力のある肉亀頭を埋め込まれると、自分の口から本心で屈服の言葉を告げてしまいそうになる。

「あんなに感じやがって」「一皮剥けばただのアナル狂いじゃねえか。まったくとんだスケベ王女様だぜ」

囚人たちがアナルセックスを眺めながら肉棒を再びしごき出す。それに合わせるかのようにダグマールの腰使いも性急さを増してきた。

ズボッ……ズチャあ……ッ…ヌチャ……ッ。

下品な破裂音、恥音が弾けクレアの羞恥心を煽る。直接触れられない膣奥が悦楽の悲鳴

を上げ、熱い何かが胎内から、肉体から次々と弾けていく。胸が苦しい。ビンビンに尖り勃った乳首を床に擦り付け、快感を貪る。

（そんな……不浄の穴なのに…ッ…どうして…こんなに……ッ……！）

自分が本来排泄にのみ使うべき肛門から性感を得ているという事実。それも卑劣な男たちの前で淫女のように喘ぎ声を上げながらの淫虐にマゾヒズムを刺激されてしまう。

「あん……あん…あぁ……んむ……ッ……んんん……」

あまりの快楽に無理矢理喘がされているのか、自分で快楽の声を上げているのか判断がつかなくなってきていた。

「んむむぅぅ、たまらん、そろそろ出させてもらうぞ、ほれ…言いたいことを言ってみろ」

その言葉と同時に口から声が自由になった。叫び声にも似た吼え声を上げる被虐王女。

「おおおおおお殺す殺すぅっころしてっ……」

ドスンッ　ドスン!!

振動が足先にまで伝わるほど深く、強いピストン。犬の交尾のように尻を抱えられ強引に突き込まれる。腫れた尻粘膜を熱い肉が通過する度熱い液体が弾け、腰が抜けそうになった。

「んんんんむぅぅぅっぅぉぉッッッ！！！！」

抵抗の言葉が一瞬にして快楽の咆哮に変わってしまう。ドンと最奥を突かれる瞬間が一番腹部からズゥンっと甘く響いた。ぞくぞくと自分の背中を這い上がってくる絶頂感が恐ろしくも待ち遠しい。

身体の感覚が鋭くなり、スーッと頭が冴えてくる。途端に自分の使命、王女としての誇り、仲間への思いなどが爆発的に心を動かしていく。身体に精気が溢れ、大きな勇気がクレアの王女としてのプライドを鼓舞する。

自分に必要な勇気、希望、愛、その全てが精神を立ち直らせ、目の前の男への憎しみ怒りが怒涛のように湧き出てくる。今ならこの男を殺せる、今ならやれる、今なら!!

ぴた…。

しかし身体は動かなかった。騎乗位のスタイルで肉棒をしっかりと握り締め、もう片方で愛しげにダグマールの腰へと身体を落とす。

ずぼぉぉぉぉぉぉぉ!!

「がぁぁぁぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

そして絶望的な一瞬を自分の手で引き起こしてしまう。自ら愛する人の男性器を迎え入れるように、ゆっくりと、ゆっくりと肉亀頭が処女の膜を突き破っていく。

「がーっはっはっはっは!!　どうだ？　ワシが憎いかワシを殺したいか？　ほれ、ワシの首はここだぞ、ほらやってみろほれ、ほれぇ！」

痛みとともに心臓を焼くほどの憎しみが湧いてくる。だが純潔の血が、愛する側近に吸い取られた愛液が、挿入をスムーズにしていってしまう。ゾクゾクとした快美感が背筋を走る。憎い宰相の肉棒が悔しいくらいに「美味しい」。初めてなのに、気持ちよすぎる。

（やめろぉぉぉぉぉぉ……これ……以上…こんなヤツで……イキたくないぃッッッッ）

心を動かす様々な気持ちを快楽が侵食していく。二度と味わいたくないおぞましい絶頂

感がひたひたと近づいてくる。

「んあぁ……ッ……くそぉぉぉぉぉぉぉぉぉ………っ!!　殺せぇ！　殺せぇぇ!!」

あまりに残酷すぎる仕打ち。快楽の中、涙を流しながら叫び続ける。やっと諦めかけていたのに、楽になれると思っていたのにかりそめの希望を与え、そこにすぐ絶望を叩き込まれた。究極の屈辱の中、自ら命を絶つことすら許されない。

「すぐにその憎しみも快楽に変えてやるわ、ほれ、もっと腰を動かせ！」

言われるがまま衆人の中、太った腹の上でゆっくりと腰を動かす被虐王女。既に身体がダグマールの肉棒に馴染んできてしまっている。甘い汗を吸った鎧の背中を反らしながら、破瓜の残滓が早々に流れてしまうほどにボタボタと蜜が零れ落ち、下穿きを濡らす。

「んんんん………ッ……あぁ……ふぅぅ……」

ずっちゅ………ぬっちゅ………ぐちゃっ………。

桃尻を上下にゆっくりと振りながら、全身から汗を振りまく。紅潮した顔を伏せ、じれったいほどの挿入の一回一回に耐える。精神がしっかりとしているのが余計に悔しい。快楽がごまかされずに、しっかりと伝わってしまう。

「はぁぁぁっ……くぅぅっっ……ッ」

心が破瓜のショックから立ち直り、身体を落ち着けようと思うのだが、どうしても腰が甘く痺れてしまう。この甘やかさが怖い。口から吐息とともに我慢しようと思っている可憐な喘ぎ声が零れてしまう。一定感覚で、腰を宰相の腹に叩きつける。一糸乱れぬリズムがまるで男の上で淫らなダンスを舞っているようでもあった。

（くぅぅ……気持ち…よすぎる……ぅッッ）
「くっくっく…口ではワシが憎いようなことを言っておるが、身体は正直なものよ。今はお前を操ってなどおらんぞ。ほれ、腰を止めてみろ、ほれ！」
そう言われ、身体を止めようとするが、身体が勝手に動いてしまう。
「そんな……はず……は……んん」
いや、身体は自由に動くのだ。自分の意のままに。それでもなお、姫騎士は自分の欲望に従って腰を動かしてしまっている。
（そんな……私……この男を欲しがってる……の……ッ!?）
信じられない気持ちになりながらも腰を自ら振り続けるのだった。挿入感に備え、歯を食いしばり、意思の強そうな目元を引き締め、腰に力を入れ、肉棒が膣壁に触れる箇所を最小限にする。
「嫌……そんなの…ッ……私は……私は……ッ!!」
下腹部から徐々に侵食してくる恐ろしい快楽の波が思考を、肉体を全て奪い去ろうとしてくる。全身の神経を頭に集中させ、身体中から噴き出す汗を振りまきながら、身体を揺すり、自分の置かれている使命、仲間を思い出しどうにか快楽の奈落から抜け出そうとする王女騎士。
ズチュ……ッ！
しかしそれでも、どれだけ努力しても、重く切ない快楽がクレアの女壺に直撃してしまう。強い快感が身体を強張らせ、何度もおとがいを反らす。勇猛の証である赤毛がはかな

げに揺れる。快楽慣れした美尻が誘うように淫らに円を描いてしまうのだ。
（あぁ…もう私は……心も身体も…奴隷になってしまったんだ……）
自分の意思で快楽を貪ってしまう身体に呆然となってしまう。
ズンッ。
少し力を抜いてしまったその時、いつも以上にペニスを深く迎え入れてしまう。凶悪なダグマールの亀頭先が子宮の穴を正面から捉える。
「おぉぉぉぉうううんんん……ッッッ!!!」
じわ…ッっと心の奥まで快楽が染み渡る。恋する乙女のように胸が甘く甘く締め付けられるような感覚。どこまでも醜悪な肉勃起を愛しく腰で追いかけてしまいそうになった。自らの意思で、憎き男の顔に抱きつき、唇を求めてしまう。
（ぁ……ッ……こんなの……ッ……我慢できるはずがない……ぃッッ）
泣きたくなるほどの快感。事実、あまりの切ない快楽にクレアは涙を流していた。へそ の裏がひくひくと勝手に収縮し、全身が絶頂を求めるようにガクガクする。尻穴をきゅっとすぼめ、淫蜜が男の腹に水溜まりを作る。どうしようもない淫熱が子宮を痙攣させ、めくるめく一瞬へと身体を連れていこうとしてきた。
（い……いく…ッ…イクの……いや……ッッッ）
鋼の意思。甦った姫騎士の誇りがかろうじて、あと一歩の所でその一瞬を堪える。男の臭い口内に可憐な唇を押し付け、汗まみれの身体をびくつかせる。しかし腰から力が抜けてしまって、次の挿入に耐えられるかわからない。

「くっくっく……どうだ？　気持ちよかろう？　ワシの奴隷になるか？　ワシを愛するか？　どうだ、どうなんだ？　がーっはっはっは……」
高笑いするダグマールを睨みながらも顔を上気させ素直に腰を落としていく姫の姿は、まるで愛する者同士の性の営みにも見えた。そんな光景が自分でも想像できてしまい、一層怒りと羞恥が増す。
ズンンッ!!
再び窒奥に衝撃。ゆっくりと爛れた粘膜に締め付けられ、肉棒が喜びの声を上げる。
（深いぃぃ……ッッ）
腹の奥から低い喘ぎを漏らして、イクのを耐える。ふらつく身体がダグマールに倒れこみ、その憎い男の背中をしっかりと抱きしめる。
「ほうほう、そんなに熱心にワシを締め付けおって、そんなにこのチンポが愛しいか？」
悔しさを噛み締めながらも反論できない。身体が言うことを聞かない。せっかく取り戻した勇気が心からぽろぽろと零れていく。薄鎧の所々が汗や淫液に濡れそぼち、乱れた服がぴちゃぴちゃと音を立てて肌に貼り付いた。
「うぬぅぅそろそろ我慢できなくなってきたわ。そろそろ引導を渡してやろう」
甘い締め付けに焦れたダグマールがとうとう自分から腰を突き上げてきた。激しい動きに白い肌から汗が飛び散り、それが弾ける愛液と混じって光の筋を作る。
ズンズンズンズンズン!!!
「あぁぁあぁぁあぁやめ…ろぉぅ……ッ…イク……イってしまうぅぅぅぅう……!!」

あられもない声を上げながら形ばかりの拒絶をする奴隷姫。もはや抵抗しているのは引き締まったクレアの顔だけであった。連続で突き込まれるたくましい肉に子宮が完全に屈していた。ジンジンと疼く膣奥からドロドロとした濃密な愛液を亀頭に塗りこめ、優しく、力強く肉の竿を締め付ける。むちっとした尻が快楽に喜ぶように円を描き、微かに胸を押し付けるようにダグマールに抱きつく。

「…ぐふふ！　喜べ！　このまま中に出してやるぞぉ!!　今まで経験したことのない快楽の中、正真正銘ワシの奴隷にしてやるわ」

（膣内…は……ッ…嫌……ッ!!）

妊娠の恐怖が一瞬だけクレアの心をひるませる。しかしこの憎き男の子を孕むという絶望感がマゾヒズム快楽となって姫奴隷の脳を痺れさせる。何より、自分の膣内の奥の奥、子宮の入り口にまであの熱くてとろみがかった精液を注がれることを想像すると、切ない期待で胸がドキドキと高鳴ってしまうのだった。充血した赤い媚尻をフリフリといやらしく振り乱し、鎧のめくり上がった腰が蛇のようにくねった。

「さぁ言ってみろ、お前の主人は誰だ？　お前の愛する男を言ってみろ!?」

耳元で強く囁きながら、腰を続けざまに送り込む。溢れ出た愛液が湯気を立てて、結合部から零れ落ちる。膣内射精の愉悦の期待が頭の奥にまで染み渡り、操られたわけでもないのに勝手に口が開く。

「私の主人は……主は…ぁぁぁ……あなた……ですぅぅぅ…私は奴隷になりますぅぅ！…私を妊娠させてぇぇぇぇ……んむむむぅぅぅ」

唇を奪われ、舌が千切れるほど強く吸われた。中年男の臭い口臭がクレアの鼻腔を刺激し、頭を痺れさせる。そして下ろす腰に合わせて一際ドンッと強い突き上げが王女の身体の芯を貫く。身体中の血液が逆流し、顔が真っ赤に染まる。

「んむうぉおおおおおっおっおっおっおおおおおおおおおおおお!!」

（イクぅぅぅっぉお……ッッッッ！！！！）

憎き男の口の中に絶頂の叫びを上げ、泣きながら女の快楽を味わう。顔を伏せ、歯を食いしばりながらイキ顔を晒す。そしてそれに追い討ちをかけるようにダグマールは身体を離し猛然と腰を使う、肉棒が極限までビクビクと痙攣する。

「おおおおお!!　出すぞぉおおおお」

びゅっるるるるるるるるるるるっっっ。

どくどくと発射される熱い精液が膣内を満たしていく。クレアが心の底で一番欲しがっていたモノ、究極の充足感。恐ろしいまでの幸福感が頭を白く塗りこめていく。

「……ッッッッッッ！！！！！！」

声も出ないほどの絶頂。身体の奥で何度も小爆発が起き、それが大きな絶頂を何度も誘発する。子宮が甘く痙攣して、止まらない。泣きそうなほどに精液が美味しい。全身に鳥肌が立つほどの幸福。女としての性の幸せを心の底から享受するクレア。

腰をビクンビクンっと跳ねさせながら、その健康的な太腿を絡みつかせながら必死にダグマールにしがみつく。

「私は……姫奴隷です……私は……あなたの…どれい……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!
キルタイムのアダルトコミック誌!
業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!
二次元ドリームマガジン
偶数月
17日発売
魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!
コミックアンリアル
奇数月
12日発売
フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!
コミックプリズム
不定期
発売
KTCといえば闘うヒロインアンソロ!
メガミクライシス
奇数月
中旬発売
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて!
キルタイム
検索
Click
電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!
※いずれも18歳未満の方は
購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!